

現代青年(女子)のスポーツ意識・行動の傾向について

松浦 三代子 (東京女子体育大学)

青年女子 スポーツ意識 スポーツ行動 体育好き 体育嫌い

1. 研究目的

1980年文部省指導要領の改訂により「楽しい運動」が提唱されて10年が経過しようとしている。その成果は今日のスポーツ人口の増加が証明している。特に女性のスポーツへの関心の高まりは目を見張るものがある。スポーツの種類、質、スタイルも様々である。このようなパワーの生まれてきた背景には、スポーツの大衆化現象、すなわち女性が家庭から解放され、社会進出への抵抗感が減少し、また豊かな社会の到来に伴って美容や健康への強い関心がスポーツ行動に結びついたものと思われる。しかし他方では受験競争の弊害による進学塾通いから運動体験の乏しさ、その他いろいろな体験不足が原因で運動嫌いになっている者も見受けられる。これらは幼小児期における両親の養育態度や養育環境の影響などによるものと思う。

本研究は小、中学時代にスポーツや体育の好きであった者が、どのような養育環境で成育しているか、また過去にどのようなスポーツ体験をしているか、現在のスポーツ意識から、さらに将来のスポーツに対する期待等はどのようなものであるかについて調査を試み、現代青年(女子)のスポーツ行動の傾向を探ろうとするものである。約70項目の質問中、有意差の認められた因子を中心に考察する。

2. 研究方法

対象者は以下の通りである。(1)方法 関東、東北地方の短大、大学の各2年の女性を対象にアンケートによる調査 (2)調査時期 1990年4~5月 (3)対象者 短大2年生 603名 大学2年生 941名 合計 1,544名

3. 結果、考察

(1) 小、中学生時代に①学校の「体育が好き」であったと答えた者のうち、大学生では「非常に好き」31.7%「好き」55.5%短大生では「非常に好き」28.5%「好き」61.4%いずれも高い数値を示している。②学校の「授業の楽しさ」についてみると大学生は「非常に楽しい」5.5%「楽しい」60.7%短大生「非常に楽しい」6.1%「楽しい」68.4%となっている。①と②を比較すると、学年があがるにつれて「体育嫌い」になる傾向が伺われる。

体育嫌いの原因には、幼小児期の両親の養育態度の在り方をはじめ、日本のスポーツ発展の様相にもみられる。学校では運動部と選手が中心である。学校、社会ともに一般の者や劣る者のための施設もクラブもそして機会も殆ど用意されることがなかった。学校体育の指導の在り方にも責任があると思う。

特に、体育が好きであった者の幼小児期の両親の養育態度をみると①父母ともによく遊んでくれた②母親の躰が厳しかった③父母ともにスポーツ活動に理解をしてくれた④父母ともにスポーツに興味を持っている⑤市街地に居住した者が多い⑥遊び場は校庭、公園、家の周囲である。①③④⑤⑥は0.1%、②には5%の有意差が認められ、養育環境の及ぼす影響の強いことが認められる。

(2) 現在、あるいは過去の体育の授業で「いやな思い」をしたことがあるかについてみると、大学生の場合67.7%、短大生の場合67.5%で、その内容は①うまくない、②無理やり

にやらされた、③ゲームをさせてくれない等の項目があげられている。(大学、短大いずれも0.1%の有意差)

教師の考える体育の楽しさは教育目標や、それを達成するために、自分達が行う教育活動と結びついた「楽しさ」になりがちであり、生徒の側は必ずしもそのようには受けとめていないこともある。特に学校体育は規則や激しい運動があつて学習者の中には、つまらないとする者も少なくないようである。

(3) 中学・高校時代のスポーツクラブの加入状況についてみると、クラブに3年間加入していた者は中学時代では大学、短大いずれの場合も約1/2である。高校になると「全く加入したことがない」者が「体育嫌い」の者で、(大学、短大20.7%)であるのに「体育好き」の方は(大学23.0%、短大27.0%)となる。一方「体育嫌い」でも中学では11~13%、高校では約4%の者が3年間も運動系クラブに所属していたということは注目すべきことと思う(いずれも0.1%の有意差)。高校になると加入率が下がるのは、種々な学科も加わり、運動以外に興味、関心も広がることや、また受験準備などの影響の結果と思われる。(4) 自由時間について1日の自由時間の量は大学生2~3時間が最も多く、次いで4時間以上となる。短大生は4時間以上が最も多く、次いで2~3時間となっている。その過ごし方をみると、平日では「テレビをみながらなんとなく過ごす」、「友達のつき合い」となっている。大学、短大ともスポーツ行動への志向性は4番目にあげられ、その数値は(11~13%)に過ぎない。(5) クラブ加入状況についてみると、大学、短大ともに加入率は50%にも満たない。またそのタイプは、大学、短大いずれも同好会志向である。最近の傾向をみると激しい規則や、激しい運動を嫌い、気の合った仲間、すなわち複数校で一緒に楽しく活動するサークルを好む傾向がみられる。

(6) スポーツの種目に対する関心についてみると、現在最もやってみたい種目は1位テニス、2位スキー、3位水泳、4位乗馬であり、将来にわたって行いたいスポーツ種目は上記の4種目に続いてエアロビクス、スキューバー、ゴルフ等があげられている。

(7) スポーツ、運動に対する意識について 大学、短大とも自分の健康には自信を持っている。さらに運動は健康に役立つ、自分の子どもにはスポーツをやらせたい等、社会的、精神的、肉体的にもそれ等の側面に養われる効果を認める傾向がみられる。運動不足を感じ、もっと運動がしたいと思っているのは大学生のほうである。

(8) 生涯スポーツへの期待について 結婚後もスポーツは継続したいと考えている者が多い。しかし、出産、育児を考えると夫や子ども家庭の協力がないと困難であろうと思う傾向もみられる。さらに、スポーツをすると「女性らしさ」が失われるなど、マイナス面をあげる学生なども多い(大学1%、短大0.1%の有意差)。

4. まとめ

以上、現代女子学生のスポーツ意識・行動にはたらく各条件についてみてきたが要約すると以下のものである。①運動の好き嫌いと同親の養育態度との間に強い関係がみられた。②体育好きな学生は総じて健康に自信を持ち将来ともこれを維持したいとの欲求がある。③スポーツによつて養われるであろう社会的、体力的、精神的側面に高い評価がみられる。④一般にスポーツ行動には積極的とはいえない。クラブ加入者は約50%でそのタイプは同好会やサークルタイプが多い。⑤生涯スポーツについては(イ)自由時間の増加(ロ)スポーツ人口の増加(ハ)スポーツは生活の中で重要な位置を占めるなどのことが予測されている。